

立ち読み版



株式会社小川製作所 取締役  
おがわ まさよし  
**小川 真由**さん  
1980年生まれ。慶應義塾大学大学院理工学研究科にてシステム工学、航空宇宙工学を専攻。前期博士課程修了後、富士重工業株式会社（現・株式会社SUBARU）の航空宇宙カンパニー・航空機設計部にて、新型航空機の設計と開発に従事。その後、切削加工の町工場での勤務を経て、2012年より家業の小川製作所に入社。次期社長として実質的に経営に当たるとともに、独自の事業モデルを展開。また、SNSや各種メディアにて、製造技術や中小企業経営、日本経済や海外市場に関する幅広い情報発信を行っている。

【写真】安岡 嘉

## 町工場の尖った技術と 独自の事業モデルでDXを乗り越える

【取材・文】原 正紀  
株式会社クオリティ・オブ・ライフ代表取締役、株式会社スマートバリュー（東証一部上場）社外取締役、キャリアコンサルタント協議会常務理事・事務局長、高知大学客員教授・経営協議会委員、成城大学非常勤講師、中小企業診断士。早稲田大学卒業後、株式会社リクルートを経て起業し、人材ソーシャルビジネスを展開。著書「定年後の仕事は40代で決めなさい」（徳間書店）、「インタビューの教科書」（同友館）など多数。

HARA'S BEFORE

小川さんは大手企業で研究・開発に従事後、家業の中小製造業を継ぐという「下町ロケット」さながらの事業承継で経営者となった。その経験を生かした独自の事業展開や、メディアでの経営論の発信などで注目されている。中小零細企業がデジタル化など時代の変化にどう生き残っていくか、そのヒントが得られるはずだ。



### 付加価値の高い技術で勝負する

原：小川さんは、ドラマ「下町ロケット」のような事業承継をされたと伺いました。

小川：当社は、1953年に祖父が創業したのですが、当時は個人事業でステンレス製の厨房器具などを製造していました。学校給食が全国で始まるタイミングで、給食用機材や配膳用台車等を製造していたのです。その後は、大手の厨房機器メーカーとの競争が激しくなり、建築金物の製造などに手を広げていきました。

私は2012年9月に当社に合流するまでは、大学院で航空宇宙工学を学び、富士重工業（現SUBARU）の航空宇宙カンパニーに就職して、3年ほど航空機の開発技術部門に勤めていまし

た。ある時、上司から「無人島で半年ほど缶詰めになる仕事をしてもらいたい」と言われました。新婚時代だったので悩みましたが、やがては家業に戻るつもりでしたし、仕事も区切りの時期だったので、会社を辞めようと思ったんです。大手メーカーに就職したのは航空宇宙分野への興味と、完成品に関わりたかったからですが、それも経験できましたから。

当時、家業は父と母で細々とやっていて、「戻りたい」と言ったら「お前の仕事なんかない」と返されてしまいました（笑）。そこで中小製造業の実務を学ぶために、近くの機械加工業の会社で4年間、修業させてもらいました。

原：現状の事業について教えてください。

小川：大きく3つの事業を行っています。

1つ目は、中小製造工場としての機能です。職人にしかできない、人手の作業に特化するという、デジタル化（DX）に逆行するコンセプトです。ものづくりには人手でしかできない工程があるので、それに特化して受注します。人材に付加価値が稼げるような教育をして、医療器具や食品機械の研磨・溶接など、多品種少量の生産を社内工程としてやるものです。

2つ目は、付加価値の高い、最先端の金属加工部品製造です。100社以上のパートナー企業を集めて経営者同士でやり取りをしながら、難しい仕事に1品ずつ丁寧に対応していくものです。それぞれ企業の加工設備などを融合していくのですが、自社の仕事の合間に単発案件や多品種少量案件などをやってもらいます。まずは

続きは雑誌で